

〈文学場〉の可能性

——松本和也著『文学と戦争——言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』（ひつじ書房、二〇二二年十一月）

前田 貞昭

—

昭和文学史の定番と言うべきは、「昭和文学史の専門家」（「あとがき」『昭和文学覚え書』三一書房、一九七〇年五月。引用は『平野謙全集』第13巻、新潮社、一九七五年十二月、577頁）と自負した平野謙の「昭和文学史」であろう。

その平野昭和文学史を特徴附けるのは、「昭和文学の可能性」を開きたいという強い願望（あるいは夢）が構想と呼べるまでに昇華された三派鼎立説と、同時代を生きた者のみに特権的に許された現場感覚である。構想力（文学史家）と現場感覚（文芸時評家）——この両者が相俟って、平野昭和文学史を作り上げていたといつてよい。

ずいぶんと遡るが、かつて昭和文学史論の整理を試みた磯貝英夫が採用したのは、まず「平野謙の昭和文学史への視点と構想の大様」を押さえ、次に、それとの関わりの上で「他の人々の異論や独自の観点」を検証するという手順であった（『争点・昭和文学史の構想』『講座日本文学の争点』6〈現代編〉明治書院、一九六九年五月。引用は『現代文学史論』明治書院、一九八〇年三月、228頁）。近くは平浩一『文芸復興』の系譜学——志賀直哉から太宰治へ』（笠間書院、二〇一五年三月）の第一部が「文学史の形成と「文芸復興」——平野謙の文学史観を中心とする戦後研究の検証」と題して、平野昭和文学史を検証するべき筆頭に据える。定番と呼んだ所以である。

回顧的に語ることを許して貰えば、いつまで経っても本題に届かない平野の文芸時評を高校時代に愛読し、作品論が幅を利かせた時代に学部・大学院を過ごした私のような世代にとつては、「私は中途半端が好きだ」と掲言するにもかかわらず、簡明に整理して打ち出した三派鼎立説は、明治始発期から戦後文学までも広く見渡せる概念装置であり、高い達成を示した話題作や時々の問題作、文学論争を中軸としつつ、関連する作家・作品が序列に従って居並ぶ重宝な文学史であった。しかも、平野は戦後文学をリードした近代文学派の一人であり、私小説二律背反説など文学史に関わる論点の提示者としての重みもあった。

ところが、困ったことに、私がつばら研究対象としてきた井伏鱒二という作家は、平野昭和文学史にはまことに収まり具合が悪い。近代文学グループ（平野・荒正人・佐々木基一・平田次三郎・本多秋五）が編纂・分担執筆した近代文学社編『現代日本文学辞典』（河出書房、一九四九年七月）では、確かに担当の佐々木基一が井伏文学の全体像を要領よくスケッチしている。だが、佐々木は井伏の項目を「井伏鱒二は日本文学の常道から常

に遠くに押出されながら、庶民文学の近代性を結集させた稀な作家である。」(54頁)と結ぶ。「日本文学の常道から常に遠くに押出されながら」とは含蓄のある約言だが、「日本文学の常道から」「遠くに押し出」して来たのは、平野を代表格とする、近代文学派の日本近代文学史(昭和文学史)ではなかったか。

文学をめぐる様々な現象を一挙に把握することが不可能である以上、何らかのかたちで分類・整理・階層化し、それを時系列に沿って叙述されることで、ようやく私たちは全体像を把握できる眺望点に立つことができる。具体的には、作品を作家の下にまとめ、次いで作家を文学グループに括るというかたちで階層化し、それを史的に叙述した文学史は分かりやすい。加えて、平野昭和文学史の到達点である『昭和文学史』(一九六三年十二月)は筑摩叢書に収められて広く流布し(同叢書の中村光夫『明治文学史』、臼井吉見『大正文学史』と併せて明治・大正・昭和と揃った近代文学史は、同じようなスピードで増刷を重ねている)、結果として権威化された。

しかし、分かりやすく使い勝手が良いことや普及していることと、それが適切であることは必ずしも同じではない。井伏が属するとされる新興芸術派はジャーナリズムの都合によって結成され、「芸術方法において独自のものをうちだすことができなかった」(筑摩叢書版『昭和文学史』61頁)と評するのだから、新興芸術派という文学グループに括ること自体が破綻している。平野昭和文学史に限らず、作品↓作家↓文学グループとして階層化する方法・観点で捉えきれないものがあるとすれば、その方法・観点到代わるものが俟たれるのは必然であった。しかし、必然であったことは、その出現が容易であったことを意味しない。

本書が目指すのは、かつて〈文学史〉として定型化しているような、文学現象の通時的叙述ではない。文学現

象に関わる問題系を設定し、その問題系が相互に連携・侵食してネットワークを形成している様相を、もっぱら共時的観点から観察する——そんなイメージを持てばよいだろうか。昭和十年代文学を解析した本書は、平野昭和文学史への反措定として存立すると勝手な言い方をしてみたい。その勝手な言い方の延長上でいえば、平野の三派鼎立説の構想に代えて「フラットな視座」(20頁)に立ち、同時代を生きた者だけに許される現場感覚と体験の時間に代えて「精度の高い調査・分析・考察」(15頁)を蓄積するのが本書だと見える。

私は井伏鱒二を介して昭和十年代文学を垣間見た者に過ぎず、氏が採った仮説や基本姿勢そのものの是非・妥当性を直接に問う用意はない。視座が「フラット」であるか否かとか、「分析・考察」の精度の粗密とかを計る能力もない。昭和十年代を対象として取り扱う時に出会った私なりの問題に、松本氏が本書でどのように対処しているかを考えてみたい。また、これまでの知見の何が修正され、何が新たに加えられたかを問うてみたい。それは、逆に、仮説・基本姿勢の是非を測ることである筈だ。

二

昭和十年前後の文学状況(ここでは「文学場」というのが相応しいか)への関心と、同時代の視座からのアプローチという方法とは、既に松本氏の最初の単著『昭和十年前後の太宰治——〈青年〉・メディア・テクスト』(ひつじ書房、二〇〇九年三月)から、氏自身の言葉を借りれば〈芸風〉として培ってきたものである。爾来、太宰治という署名者から対象を拡張、〈文学場〉を鍵語とする、

『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、二〇一五年三月）

『日中戦争開戦後の文学場——報告／芸術／戦場』（神奈川大学出版会、二〇一八年三月）

『太平洋戦争開戦後の文学場——思想戦／社会性／大東亜共栄圏』（神奈川大学出版会、二〇二〇年五月）

に次いで、本書がまとめられた。

本書においても、平野の文学史的整理は「スタンダード」として尊重される。しかし、「スタンダード」であるがゆえに、疑義を呈され、再検証を迫る対象ともなる。平野「昭和十年代の文学」が、昭和十年代を「一種の非文学的時代」と概括し、「沈黙と韜晦が最高の芸術的抵抗」だったとすることについて、「おそらくこれは、今なお、昭和一〇年代文学（史）に関するスタンダードな評価であり、また、一面妥当でもある」と一応はその整理と評価を認めつつ、しかし、非文学的時代／芸術的抵抗という処理は単純に過ぎると批判する（10頁～11頁）。また、「私小説を戦時下文学（史）における《抵抗》と位置づけ」た平野に対して、「こうした評価の仕方は、一面的にすぎ、抵抗とみなす根拠も自明ではない」（405頁）と疑念を呈する。昭和十年代の文学を殆ど不毛に近いと評する平野謙昭和文学史に対して、松本氏が新たに昭和十年代の文学を再検証しようとした時、文学史家・平野謙の言説が批判の対象として引かれるのは当然である。その一方で、文学史家・平野謙と同じくらいの頻度で文芸時評家・平野謙が登場する。戦後文学史の局面ならともかく、こうした著書で昭和十年代の文芸時評家・平野謙が時代の当事者として登場するのは珍しい。そこには〈文学場〉を検証しようとする松本氏の関心の在処が窺えよう。

平野昭和文学史は、文化統制に関わる官民組織の新設改廃統合や、文学グループや同人雑誌の離散集合に筆を

費やし、それにまつわる作家論的挿話を差し挟みつつ叙述を進めて行く（この時代を生きた平野の現場感覚が躍動するところであり、文学史が人間の物語と密着した面白さを生み出すのだが）のに対して、松本氏は、作家の動静や伝記的要素という生身の人間関係は考慮の外に置く。考察の対象として設定されるのは純粹な言説空間である。時々言説空間が構成されていることそれ自体が「経験的・社会的な事実」であるとする赤川学に倣って、「個々の言表主体や掲載媒体による発言の重みや、言説の彼方に想定される現実については、原則として考慮しないこと」によって、フラットな視座からの分析を徹底した」（20頁）という。

事後的介入を避けて〈文学場〉の今にアプローチするため、氏は、文学現象や歴史的事象を氏自身の言葉で概括することや、後年に整理・作成された叙述を採用することを潔しとせず、出来る限り当時の言説空間に出現した言説を引用しようとする。氏自身の言葉でまとめることは容易だった筈なのに、昭和十年の新聞小説の掲載状況については勝本清一郎の「新聞小説検討」からの引用に語らせ（63頁）、「満洲移民」については、「同時代の報告」である和田日出吉「満洲移民の現在と将来」を引く（312頁、313頁）。こうした当時の言説の引用によって語らせようとする姿勢を氏は容易に崩さず、〈文学場〉の今を現前させようと試みる。

その場に相応しい言説が必ずしも簡単に見つかるわけではあるまい。これは適切な文献を用意できるほどに氏が幅広く文献に当たっている証しである。「文学言説が掲載された新聞・雑誌を資料コーパス体とし、可能な範囲での網羅的な調査を実施した」（20頁）と言う網羅性を直接に証す手立てを私は持たないが、間接的な例なら挙げられる。第13章で『現代日本文学論争史』下巻（未来社）収録五論文が「『文学非力説論争の』今日の論争イメージを体現する」（402頁）と指摘する。僅かな資料によって文学非力説論争のイメージが作られてきたのだが、本書

で氏が引用する文学非力説に直接に関係する資料だけでも二十点を越える。また、第1章の注12（56頁）に記す、氏の手に成る「昭和10年代における文芸時評（Ⅰ）」「昭和10年代における文芸時評（Ⅱ）」が当該雑誌の現物に眼を通して作成されたことは明白で、それが二つの調査の信頼性、延いては、網羅的であろうとする本書が広汎で綿密な調査を踏まえていることを傍証するだろう。

三

前著『太平洋戦争開戦後の文学場』で「昭和一〇年代、戦時下に言表された言葉を、現在のコンテクストから素朴に読むことは、本来の文学者の企図や同時代の意味作用を見誤るおそれを多分にはらむ」（Ⅺ頁）と述べていた。このような困難に関わって、本書では如何なるアプローチが用意されているのか。

昭和十年代文学を検証した従来の方法的限界については本書「序」（第二節・第三節、6頁～15頁）が述べるところだが、私なりに言えば、「作家論的視座」（380頁）によって構築された論理の一番の問題は、それが個別作家の内に閉じてしまうことである。同時代読者に読まれることを前提に発表されたにもかかわらず、同時代にどのように受容されたかという視点は軽視される。問題の二つ目は、「韜晦」的表現の奥に作家の「真意」を読みとることが出来れば、芸術的抵抗として固定され、時局順応的言説があつたとしてもそれは一時の「仮装」であつたかのように見做してしまいがちなことだ。言論統制の在り方が時期によって変化してきたのと同様に、作家自身も変化し得るのだが、そうした視点は排除され、芸術的抵抗に身を挺した良心的作家の偶像を壊すようなこ

とはしない。三つ目は、作家の「真意」の検証可能性の問題である。氏が言うように「文学者の言動には《仮面／真相》がわがちがたく／みわけがたく現象することが常態化していた」（7頁）以上、作家の「真意」を仮に括り出したとしても、それが検証可能かと問えば極めて危うい。実際のところ、「真意」なるものを支えているのは、《抵抗》と《順応》とを腑分けする（腑分けしたと信じる）、各論者の読解能力と論理構成員力しかないのである。

作家論的視座の限界を回避するべく、本書で用意されていて有効に機能しているのが同時代言説の「表層」を辿るというルートである。

第13章「戦時下に文学の「非力」を語ること——高見順「文学非力説」では、作家論的枠組においては危うい仮説／可能性の域に留まるしかなかった問題が、言説の受容という検証可能な領域に戻して問い直される。それは、誠に単純平明なことで、時々と言説を「言葉の表層」において読むことである。「言葉の表層」という言い方が誤解を生むかもしれないので、文学非力説をめぐる分析で使われている言葉を借りて、当時の言説空間を行き交った言葉を「字義通り」に解すると言い換えてみよう。そのようにして後年の論者自身が《仮面／真相》を問うといった出口の不確かな隘路に踏み込まずに、同時代の読者の受容の実際の場に委ねられる。検証の結果、高見順に関わる言説が「明示的に言表として、字義通りに／逆説的という二様の受容が示された」（389頁）ことが確認されるのである。同様のアプローチが、第5章「日中戦争期に魯迅はどう読まれたか」における魯迅受容問題でも採用されていることを付け加えておこう。

また、高見自身が提示した「文学非力説」が高見自身の中で表層の字義のレベルと逆説的理解との間で揺れ、

その揺れは同時代受容の揺れとも共振していることを指摘する。ここに見えてくるのは、最終的帰着点から固定化されたステイックなものではなく、相互影響下で動いている、時々の微細な運動の方向を微分的な分析によって得られる様相である。たとえば言えば、平野昭和文学史が時代の動向を積分するかのよう到大掴みに掴んだものとすれば、本書は多様な可能性の渦中で蠢く文学者たちの言動を微分して、その現場の今を再現しようとしたものだと言えるだろう。

四

平野昭和文学史では井伏鱒二を巧く位置付けられなかったと書いたが、本書で展開された問題系のネットワークは、井伏の作品も拾い上げることが出来て、そのネットワークに置けば、見逃されてきた井伏の一面さえ照らし出される。昭和十年代半ばの井伏の歴史小説に、ロシア使節レザノフの長崎来航騒動に題材を得た『満洲日日新聞』朝刊連載「一路平安」（昭和十四年一月一日～六月十三日）がある。本書第6章「国民文学」とは何かを問うこと」では、国民文学論が様々な様態を取って、戦時下の国民的自覚の問題へと変奏されたことが指摘されている（189頁）。この指摘を念頭に置けば、「一路平安」は、危機に対処する憂国の志士を国民諸層が支える物語だと読むことができる。「当時の日本にとつては一種の国難」（井伏「作者の言葉」昭和十三年十二月二十四日『満洲日日新聞』夕刊）というロシア船来航の過去に題材を借りて、現在の読者に「戦時下の国民的自覚」を促すべく書かれた作品の系譜に連なり得る。井伏は歴史小説について「私は史実に自分を託すといふよりも、むしろ

る時代を託して書いてみるつもりであつた」（『史実ものについて』昭和十年十二月）と述べているが、「時代を託し」という言葉の意味も、「国民的自覚」という鍵語を持つてくれば、単純な権力批判に終わらない一面が照らし出されるのではないか。井伏が自ら筆を取った文章に減多に現われないが、例えば、池田さぶろによる訪問記事「井伏鱒二文学設計図絵」（『若草』昭和十二年十二月）には、文壇・文学状況を細かく観察し、その中で自己の向かう道筋を模索している様子が見て取れる。井伏自身が比較的气楽に発言し、また、訪問記者が文壇状況を取り込みながら書き留めた訪問記事といった補助線を加えると、一層のこと「一路平安」が「戦時下の国民的自覚」を促す文脈にあることが見えてくる。

本書を含めて松本氏の〈文学場〉をめぐる仕事は、そこに示された有効性・可能性を私たち読者が試すことで生さる。それによって、氏が言う「フラットな視座」（20頁）・「精度の高い調査―分析―考察」（15頁）が達成されているか否かは、初めて検証することが可能になるだろう。本書も採用する引用文献の掲載頁・掲載紙面の表示は、そうした検証・参照作業のために欠かせない。本書の索引は人名索引に留まるが、各部の扉裏にはそれぞれの章の概要や関連する章が示されている。目次の見出しと併せれば、詳細な事項索引よりも却って、求めるべき論述箇所が把握しやすいのではないだろうか。とはいえ、読者自ら思考・点検しつつ、氏の論述の全体の布置の中で、読者自身の課題との関連を考えることが必要だ。こうした本書のかたちは、本書が一箇の閉じた完成品であるのではなく、検証されること、また、活かされること——将来の研究に向けた礎石となることを求めているように私には思われる。